

俣埜遺跡 K 地点発掘調査の概要

Matano Site K point Excavation Outline Report



完掘状況

俣埜遺跡は、武蔵野台地東端部を開折する新河岸川の支流、江川の上流部右岸台地上に位置する。本遺跡は、昭和 52 年度に行われた最初の調査からこれまでに、旧石器時代の石器・礫群をはじめ、縄文時代早期の炉穴 25 基、中期の住居跡 4 軒、柄鏡形住居跡 1 軒、近世から近代と考えられる溝状遺構が検出されている。また、隣接地では奈良・平安時代の木炭窯や粘土採掘坑が多数検出されており、今回の調査地点においてもこれらに関連する遺構の検出が想定されていた。

俣埜遺跡 K 地点は、駐車場造成に先立つ記録保存のための発掘調査として、平成 17 年 9 月 20 日から 11 月 6 日にかけて 814 m²を実施した。調査の結果、縄文時代の住居跡、集石、奈良時代の住居跡、製鉄作業場跡、土坑、時期不明の土坑が検出された。



調査位置図



調査風景



製鉄作業場・道路状遺構検出状況



土坑群検出状況

■ 土坑群

調査区西部の斜面下部から低地部にかけて、土坑群が検出されている。土坑は斜面をほぼ垂直に、かつ方形に掘り込んで作られている。湧水のため底部は未確認だが、一部をボーリング調査したところ、底面は礫層に至り、その上には粘土が堆積していた。こうした状況から、これらの土坑群は粘土採掘坑の可能性も考えられる。



製鉄作業場跡



鉄滓・羽口・鑄型出土状況



鉄滓出土状況

■ 製鉄作業場跡

調査区北東部の斜面下部から低地部にかけて、製鉄作業場跡と考えられる遺構が検出された。斜面を掘り込んで平らな部分を作っており、遺物は鉄滓、羽口、鑄型などが出土した。東側に柱穴が2カ所検出されていることから、この場所には小屋のようなものが作られ、製鉄作業を行っていたことが推定される。また付近には、調査区西部の土坑群と同じく方形に掘り込まれた土坑が検出されている。湧水のため一部の底部は未確認



鑄型出土状況

だが、確認できた土坑底面には粘土が4cm程度堆積していた。加えて、製鉄作業場跡の西側、低地部には方形のプランをもつ道路状遺構も検出されている。



3号住居跡完掘



羽口出土状況

■ 縄文時代の住居跡

縄文時代住居跡

縄文時代中期の住居跡は、調査区南東端に全体の1/4ほどが検出された。中央やや北寄りに埋甕を設置し、そこへ向かってほぼ一列に礫を配している。礫には焼石や磨石の欠損品を裏返しにしたものが使用されていた。なお、住居中央には深さ1m程の土坑が存在するが、住居はこの土坑を埋めた後に作られている。



縄文時代住居跡遺物出土状況



縄文時代住居跡・土坑完掘

■ 奈良時代の住居跡

奈良時代の住居跡は、3軒検出された。1号住居跡ではカマドの手前や床の一部に鉄滓が張り付いており、2号住居跡でも細かな鉄滓が床の一部に散っていたことから、製鉄に関わる作業を行っていたことが推定される。3号住居跡は、カマド構築材として製鉄炉の炉壁が再利用されており、製鉄作業に関わる人々の住まいであることが推定される。



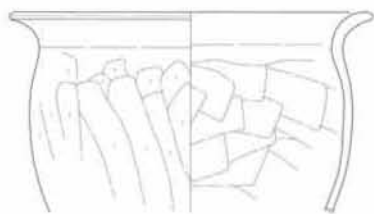
1・2号住居跡完掘



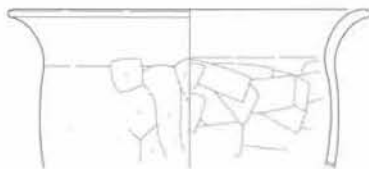
3号住居跡カマド構築材出土状況



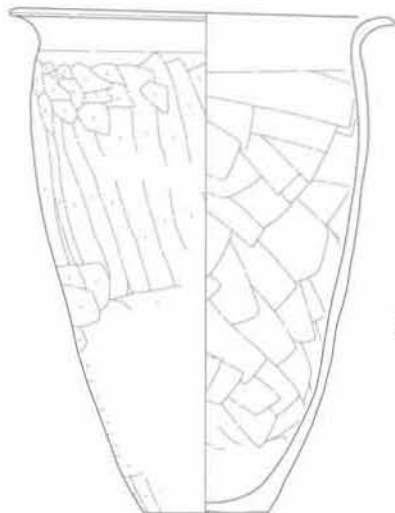
鉄滓出土状況



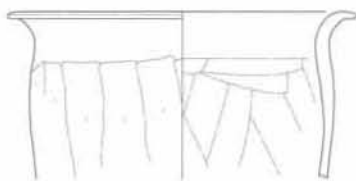
1号住居跡出土土器



2号住居跡出土土器



3号住居跡出土土器



縄文時代住居跡出土土器

S = 1 / 5



1号住居跡出土土器



2号住居跡出土土器



3号住居跡出土土器



縄文時代住居跡出土土器

■ 出土遺物

1・2号住居跡では土師器の甕や坏、須恵器片、鉄滓が出土、3号住居跡ではカマドの掛口から焚口方向へ倒れた状態で土師器の甕が出土し、鉄滓も少量出土した。

K地点の調査では、奈良時代の製鉄作業場跡やその作業に従事していたであろう人々の住居跡が検出された。隣接地点であるI・J地点でも同時期と思われる木炭窯や粘土採掘坑が検出されていることから、この付近一帯において製鉄に関する一連の作業が行われていたことは明らかである。今後は、出土遺物や採取した炭化材の分析を行って時期を確定するとともに、隣接地点の調査成果も含めて全体像を把握し、本報告書を刊行したい。

三芳町の文化財・考古1

俣埜遺跡K地点発掘調査の概要

発行日 平成18年3月31日

編集機関 三芳町教育委員会

入間郡三芳町藤久保1100-1

Tel.049-258-0019

発行 三芳町教育委員会

印刷 深志印刷株式会社